

2014年5月9日

2014年3月期 連結決算について

- 2014年3月期(2013年度)連結決算は、航空取扱量の増加により、2期連続の「増収増益」。当期純利益は、2期連続で民営化以降の最高益を更新。
- 2015年3月期(2014年度)連結業績予想は、羽田空港国際線二次増枠の影響は限定的であり、当期純利益は民営化以降第2位の水準となる見通し。

1. 航空取扱量について

区 分	2012年度	2013年度	増減①		2014年度	増減②	
	実績	実績	数量	%	見通し	数量	%
	A	B	B-A	B/Ax100	C	C-B	C/Bx100
航空機発着回数(万回)	21.2	22.6	1.4	106.7	23.4	0.7	103.3
国際線	17.3	17.8	0.5	102.9	18.0	0.2	101.2
国内線	3.9	4.8	0.9	123.4	5.3	0.5	111.1
航空旅客数(万人)	3,343	3,604	261	107.8	3,537	▲67	98.1
国際線	2,971	3,086	115	103.9	2,913	▲174	94.4
国内線	372	518	146	139.2	624	106	120.5
国際航空貨物量(万トン)	192	199	6	103.4	183	▲16	92.2
給油量(万kl)	467	481	14	103.0	467	▲14	97.1

(1) 2013年度の実績【増減①】

- 航空機発着回数及び給油量は、オープンスカイの適用やボーイング787型機の運航再開による国際線の新規就航や増便、本邦LCC社の国内線運航の通期化等により、いずれも前期に比べ増加。
- 航空旅客数は、尖閣諸島問題等の影響は一部あったものの、円安傾向や東南アジア5か国の訪日ビザの免除・緩和による外国人旅客の増、LCCの新規就航等による国内線旅客の増により、前期に比べて増加。
- 国際航空貨物量は、メーカーの生産立地構造の変化等により輸出・輸入ともに減少したものの、成田空港を経由し三国間輸送する仮陸揚貨物が増加し、総量は前期に比べて増加。

(2) 2014年度の見通し【増減②】

- 航空機発着回数は、オープンスカイ効果による新規就航、国内線を中心としたLCCの増便や新規就航により前期を上回る見通し。
- 航空旅客数は、国際線において羽田二次増枠による大型機の減便の影響を受けることから、前期を下回る見通し。
- 国際航空貨物量は、引き続きメーカーの生産拠点の海外移転による影響を受けることに加え、消費増税後の内需落ち込みもあることから、前期を下回る見通し。
- 給油量は、近距離・小型機材路線が増便となる一方、より多くの燃料を消費する長距離・大型機材路線が減便となることから、前期を下回る見通し。

2. 連結決算について

(単位:億円)

区 分	2012年度	2013年度	増減		2014年度	増減	
	実績	実績	金額	%	予想	金額	%
	A	B	B-A	B/Ax100	C	C-B	C/Bx100
営業収益	1,892	1,994	102	105.4	1,906	▲88	95.5
営業利益	347	398	50	114.6	335	▲63	84.1
経常利益	275	333	57	120.9	271	▲62	81.3
当期純利益	153	199	46	130.1	165	▲34	82.8

(注) 業績予想は、当社が現時点で想定した航空取扱量に基づき作成したものであり、不確定要素を含んでおります。

(1) 経営成績の概要

営業収益は 1,994 億円（前期比 102 億円の増加）、営業利益は 398 億円（同 50 億円の増加）、経常利益は 333 億円（同 57 億円の増加）、当期純利益は 199 億円（同 46 億円の増加）の「増収増益」

- 営業収益は、前期比 102 億円(5.4%)の増収、営業利益は同 50 億円(14.6%)の増益。
 - ▶ 空港運営事業【増収増益】：国際線着陸料の引き下げに伴う空港使用料収入の減収を、オープンスカイの適用や本邦LCC社の国内線運航通期化による航空機発着回数、航空旅客数及び給油量の増加で補ったものの、子会社の工事保全収入の減少によって、営業収益は前期比 0.6%減の 1,068 億円。営業利益は同 0.7%増の 79 億円。
 - ▶ リテール事業【増収増益】：国際線外国人旅客及び国内線旅客の増加や円安等に伴い、子会社の物販・飲食収入及びテナントからの構内営業料収入が増加。営業収益は前期比 20.3%増の 585 億円。営業利益は同 29.0%増の 177 億円。
 - ▶ 施設貸付事業【増収増益】：建物貸付料の割引措置の解消や航空旅客数の増加に伴う駐車場使用料収入の増加等により、土地建物等貸付料収入が増加。営業収益は前期比 3.0%増の 310 億円。営業利益は同 7.4%増の 137 億円。
 - ▶ 鉄道事業【増収増益】：成田スカイアクセスの線路使用料収入の増加等により、営業収益は前期比 3.1%増の 29 億円。営業利益は同 12.5%増の 4 億円。

(2) 財政状態の概要

- ▶ 資産合計は、空港容量 30 万回化に向けた設備投資があったものの、減価償却が進んだことによる固定資産の減少等により前期末比 217 億円(2.5%)減の 8,594 億円。
- ▶ 負債合計は、社債の償還等により前期末比 384 億円(6.1%)減の 5,919 億円。有利子債務残高は、同 294 億円(5.8%)減の 4,785 億円、平均金利は前期末比 0.04 ポイント低下し 1.32%。無利子債務を加えた長期債務残高は、同 405 億円(7.3%)減の 5,172 億円。
- ▶ 純資産合計は、前期末比 166 億円(6.6%)増の 2,674 億円。自己資本比率は、前期末の 27.4%から 30.1%へ増加。

(3) キャッシュ・フローの概要

- フリー・キャッシュ・フローは、431 億円のキャッシュ・イン(前期比 5 億円の増加)
 - ▶ 営業活動によるキャッシュ・フローは、税金等調整前当期純利益が増加したこと等により、前期比 3 億円増の 699 億円のキャッシュ・イン。
 - ▶ 投資活動によるキャッシュ・フローは、固定資産の取得による支出が減少したこと等から前期比 2 億円減の 267 億円のキャッシュ・アウト。
 - ▶ 財務活動によるキャッシュ・フローは、長期借入金の返済及び社債の償還等により、前期比 42 億円増の 447 億円のキャッシュ・アウト。

(4) 2014 年度の連結業績予想

営業収益は 1,906 億円（前期比 88 億円の減少）、営業利益は 335 億円（同 63 億円の減少）、経常利益は 271 億円（同 62 億円の減少）、当期純利益は 165 億円（同 34 億円の減少）となるものの、当期純利益は民営化以降第 2 位の水準となる見通し

- ▶ 国際線における羽田二次増枠の影響は限定的であり、2014 年度連結当期純利益は民営化以降第 2 位の水準となる見通し。

(注) 業績予想は、当社が現時点で想定した航空取扱量に基づき作成したものであり、不確定要素を含んでおります。

以上